

# 「心地よさ」の追求——Catherine Beecher の ストーブにみるアメリカ家政学と啓蒙思想

杉本 裕代\*

## Designed for Comfort —— The Moral Philosophy and the Domestic Science in Catherine Beecher's Cookstove

Hiroyo SUGIMOTO \*

### Abstract

In her striking writing, *A Treatise on Domestic Economy* (1842), Catherine Beecher demonstrates how American women manage their own homes, presenting various illustrations. Her advices cover a wide range of topics including science, chemistry, child rearing, and home design. What Beecher regards as important is a concept, "comfort." The comfort that she means is not mere pleasant state, but a state of physical ease, which adds a striking effect to a spiritual development. Furthermore, it is significant that the moral philosophy is remained in the background but plays an important role in Beecher's writings. The Enlightenment influence on Beecher is fully embodied in her design for a cookstove. She pursues the American ideal of domesticity by seeking for comfort and convenient tool in daily life.

キーワード：アメリカ家政学、スコットランド道徳哲学、ストーブ、domestic manuals、心地よさ、道具史

### はじめに

キャサリン・ビーチャー (Catherine Beecher) による *A Treatise on Domestic Economy* (1842) (以下 *Treatise*) は、アメリカ家政学の原点ともいべき本であり、この書物のなかでビーチャーは、多くの図説を用いながら、家事全般のアドヴァイスを記している。

その範囲は、料理や室内インテリアに始まって、建築やストーブの設計にまで及んでおり、当時の科学的見地を盛んに取り込もうとした様子が多分にうかがえる。こうした図説を解説するビーチャーの記述の中に散見されるのが、「心地よさ」(comfort) という概念である。そしてその概念はただ美観等を整えるための表面上の言葉ではなく、ビーチャーは

---

\* 情報コミュニケーション学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

「心地よさ」(comfort) という概念が子供に与える影響について説明している。例えば、室内装飾の方法について説明するとき、部屋を心地よい空間にすることで子供の情操を豊かに成長を促すといった具合である。そして、ビーチャーは「心地よさ」(comfort) とはどんなものかを厳しく区別し、特定しようとする。それは、Nicola Tonkovich が指摘するように、図説類のなかで、具体的なサイズを示し、彼女の思想を数量化しているところから、読み取ることが出来るだろう。

本論文では、ビーチャーが詳細に解説を施した家庭内の事物のなかでも、ストーブに注目し、その背景にある思想を読み取る作業を目的とする。アメリカにおいて家政学を体系立てて論じた最初の人物とされるビーチャーであるが、そこには、経験哲学やスコットランド啓蒙思想から生じた道徳哲学からの強い影響があった。彼女は、身体を通じて受容する感覚が人格に与える影響を重要視し、快適な環境によってもたらされる経験が人格の健全な育成をもたらすという立場にいた。女性が指導権を握ることができる領域として、家庭の機能が活性化することを最重要課題とした彼女は、心地よさを追及することによって、アメリカの家庭像を自らの理想に近づけようとしたのである。

## 1. キャサリン・ビーチャーの家政学とその思想的背景

家政学の始まりを迎えるとき、無視できないのが18世紀の啓蒙時代である。この頃、ロックや、パークレイ、ヒューム、ヴォルテールなどの思想家たちはこぞって家政の理念への考察を始めるようになった。国家の繁栄を促すためには、各個人の行動の効率をよくしたり、国家を構成する単位である家庭の運営を合理化することが必要であるという発想が誕生したのである。この啓蒙主義哲学によっ

て、家政に関する知識の普及が必要であることや、従来の習慣や迷信の無知を家政学から追放し、悟性に基づいた行動や、合理主義的な態度に向かうべきであるという問題意識が浮上してきた。つまり、啓蒙主義によれば、未熟な状態はみずからの責任にあるのであり、しかも、その場合の責任とは、必ずしも悟性の欠如によるものではなく、意思決定と勇気の欠如によるものとなされるから、悟性の発達と共に思考力の鍛錬がときに問題となってくる。そして、個人の立場を尊重し、個人の独立と自由と個性が尊重される個人主義の理念が強調された。そして、既存の伝統に批判的な視線を投げかけ、経験に即した判断や行動をするという自然主義的あるいは、自然科学的な方法が強調されていたのである。

ビーチャーは、その思想の初期段階において、心理的要素の強いスコットランドの道徳哲学とロックの経験哲学を研究していた。また、彼女の婚約者であり、後に海上事故で命を落としたフィッシャー (Alexander Metcalf Fisher) は、エール大学の教授で専門は科学哲学の一分野である自然哲学であった。これらの環境は、*Treatise* にみられる科学的アプローチに少なからぬ影響を与えているといえるだろう。

また、こうしたビーチャーの思想的立場は、妹ハリエット・ビーチャー・ストウ (Harriet Beecher Stowe) と共に著した家庭指南書、*The Principles of Domestic Science* (1870) に結実しているといえる。この本には、科学との関連性がいっそう顕著に現れており、彼女たちのアドヴァイスの対象は、ストーブ、暖炉、煙突、部屋の換気などに及び、それらの説明にあたっては物理学や化学の知識が援用されている。

道徳哲学に影響を受けたビーチャーにとっては、彼女が想定する家族像もまた、啓蒙主義的な特色を色濃く映し出したものとなっている。スコットランドの啓蒙思想家たちはア

アメリカの思想に影響を与えたが、その思想の根本には、個人ではなく家族が社会の基本単位であるという考え方があった。ビーチャーはこれらの思想家たちから強い影響を受けた。ビーチャーにとって理想的な家族とは、キリスト教の教えに基づきながら、良心を形成するための重要な媒体であり、道徳心と美德の源泉であった。ビーチャーは、家族とは賢く善良な者が犠牲的労力を払って、可能な限り最高の知性、美德、幸福に到達するための訓練を与えるところであり、これは将来不滅の存在になることとして、主なる神に関連付けて行うべきであるとした。

ビーチャーが活躍した時代のアメリカは、資本主義や、プロテスタンティズム、ソーシャルダーウィニズム、ソーシャルゴスペルが相互に関連しあいながら、劇的な活力をもった産業と個人の生活を尊重する理念とが形成された時代であった。他方、そうした活力は、後に「金びか時代」と称されたように、物質主義が広がり、浸透してきたことも否定しえないところだろう。

そうした社会の動きの中で、家族の宗教教育の意義と役割に注目したのがビーチャーであった。物質主義の俗世界と、清らかな精神の「家庭」とは、俗世と天国といった構図になぞらえて、家庭を神聖視する傾向が強まった。また、この対比はジェンダー化されており、男性的な物質主義の精神とスピリチュアルな世界の女性との対比として考えられた。確かに、19世紀のアメリカで女性の人口比率が高かったように、教会では女性信者が多数を占め、産業資本主義の社会での経済発展に熱心なあまり、男性による教会離れという傾向も進み、宗教の「女性化」が顕著になったとはしばしば指摘される。

こうした背景のなかで、ビーチャーは家庭における教育を重要視した思想家であった。もともと、ピューリタンの教義では、女性が倫理的に優れているという説く傾向があっ

た。ピューリタンの教義は、家父長的な神への絶対的な服従を説くものであったが、こうした宗教の女性化の中で、聖職者が説く神は、ピューリタンの厳しい理性的な神に代わって、人間に愛を降り注ぐ自愛の神に変化していった。その中で、女性は本来倫理的に優れていると説かれるようになり、その美德として、敬虔・純潔・従順・自己犠牲などが挙げられ、女性の姿が過剰なまでに神秘化・理想化されていった。

ビーチャーは、こうした女性像を信奉し、一般に広めようとしたのである。彼女の教育理念は、家庭の重要性を認識させ、その課程を守る女性の倫理的特性が強調された。子供にキリスト教的な美德を身に付けさせるには、女性の影響力が最も有効とされ、子供を立派に育てる母親としての役割が強調されることになったのである。資本主義の進む社会の中で、女性が家庭の中で子供と接触する機会が減っていくのに対抗するように、子供の育成に対する家庭内の女性の役割が重視されていったのだ。

家庭を人間生活においてもっとも重要な場所として位置づける考え方は、ビーチャーに限らず、啓蒙主義の登場以降、“cult of domesticity”と相まって当時のアメリカ社会全般に当てはまる傾向であった。ならば、ビーチャーの思想の斬新さとはどこにあったのだろうか。それには、*Treatise* で記述されている記述方法が手がかりとなるだろう。

ビーチャーの *Treatise* は、家の構造からテーブル・セッティングに至るまでの多岐にわたる家事全般を体系立て、召使をおかないアメリカの家庭においては、どのように家政が機能しているかを記したアメリカで初めての書物であった。この *Treatise* はまた、心理学・生理学・経済学・宗教学・社会一般・政治関係に関わる様々な領域を統合し、家政の体系がどのようにそれらの領域と連動しているのかを論じた点で初めての書物といえるだ

ろう。つまり、それまで“cult of domesticity”の名の下に神秘化され、同時に疎外化されていた家政という分野に対して、思想・哲学を背景として理念的に論じたことは画期的であったのである。こうした科学的見地をふまえた家政学の系譜から考えると、ビーチャーの *Treatise* は、ホームエコノミクス運動の始祖とされるが、彼女のこうした思想的立場がそう呼ばれる由縁となっているのであろう。*Treatise* は、広く読まれ、1841年から1856年にかけては毎年増刷された。そして1869年に増補版として、*The America Woman's Home* が出版されるまで、14回も重ねた。家政の領域を通じたビーチャーの名声はアメリカにおいて一層高められていったのである。

このようにビーチャーは家庭を重要視し、そこに啓蒙主義的な分析眼をもって、彼女の思想を探求していった。それこそが、ビーチャーがアメリカ家政学の先駆者と呼ばれるに至った経緯なのである。読者への具体的に細かいアドヴァイスや、家庭用品や建物の間取り、インテリア調度品に関する細かな指示などは、彼女の著作に顕著である。これらの指示は、啓蒙主義の立場に則り、生活の中の理念を具体的に示し、広く世間に普及させるための平等主義的な思想が色濃く反映された結果なのである。そして、彼女の思想が最も体現された道具の一つが、本論文で取り上げるストーブであるといえるだろう。

## 2. アメリカの家庭とストーブの改良

19世紀初頭のアメリカは、“cult of domesticity”の時代であると同時に、“a mania for invention”の時代であったといえるだろう。技術の革新や産業の発達を相互に連動しながら、新しい機械や技術の開発が進められていったのである。こうした風潮の中で、ストーブも例外ではなかった。

そもそもストーブの開発競争の裏には、ア

メリカの燃料資源をめぐる変遷が大きく影響している。それまでは薪を火にくべるタイプのストーブが使用されていたが、薪の価格は変動が激しく、価格が急騰することもしばしばであった。こうした薪の不足によって、1830年代には深刻な燃料危機がおり、これによって注目を浴びるようになったのが、安価かつ安定した供給が見込める石炭であった。

しかしながら、Pricilla Brewerによれば、実際のところ19世紀前半のストーブは、様々な改良や工夫が施されていたものの、実用性という意味では、“useless”であった。(96) 実際の使用時における熱の供給は不安定だったし、発熱時間にも問題があった。たとえば、キャサリン・ビーチャー自身も、ストーブの難点を認めていて、解決すべきその欠点として、「空気の乾燥」「耐え難い臭い」「熱気が部屋の上部だけに集中してしまう」という3点を挙げているほどである。

ストーブの問題点が指摘されると、当然のことながら、それらの欠点を改善するべく、改良合戦が始まった。興味深いことにこうしたストーブの改良とそれに伴う利便性が、新たな反ストーブ派を誕生させることになるのだ。

ストーブの開発をめぐるのは、単に機能上の問題だけでなく、家庭内における女性の役割を変化させてしまうものとして批判する立場もあった。ストーブがもたらす便利さ・快適さが、女性を家庭という領域から遠ざけてしまうというのである。

また、女性文化人たちの中にも、ストーブが改良された形で一般に普及することに懐疑的な立場をとる者もいた。たとえば、女性編集者として高名な Sarah Josepha Hale は、伝統的な台所を中心とした家庭像を理想として、薪によっておこした火の上でスープをコトコトとゆっくり煮込むといったような牧歌的スタイルを優位なものとした。Hale に代

表されるような女性文化人たちは、ノスタルジーと共に、女性の領域としての家庭の伝統を保持しようとするために、改良されたストーブに利便性や快適性があったとしても、それを即そのまま自分たちの生活文化にそのまま受け入れることをしなかったのである。

ビーチャーもまた、家庭という領域を女性優位で、女性が専門家として主導権を握るべき領域として、重要視しようとした。しかしながら、ビーチャーはこれら反ストーブ派の人々とは異なる立場をとったのである。その違いとは、ビーチャーの科学や哲学への関心、さらに言えば、経験哲学や道徳哲学に基づいた身体の認識論に則っているという点に他ならない。

*Treatise* には、ビーチャーが考案したストーブのデザイン画が掲載され、ストーブの内部構造が図説として解説されている。ストーブの利便性向上に向けたビーチャーの意図は、ノスタルジーと共に伝統的な家庭像を保持しようとした女性たちとは異なり、新しいテクノロジーと共に、アメリカに適した家庭像を創出しようとする情熱が感じられる。改良が次々に加えられていったとはいえ、19世紀半ばごろまでは、ストーブは未だ“unsafe”であり、汚れを撒き散らす代物であり、実用性の点からみれば完成型にはほど遠い状態であった。(Brewer 126) しかしながら、ビーチャーはそこにアメリカの家庭に新しい力を与える契機を見出し、進歩した便利な道具として積極的に家庭空間に取り入れようとしていたのである。

### 3. ビーチャー哲学の終着点としての「心地よさ」

ここで注目しておきたいのは、喜びの感情には、さらに二つの系譜があることであろう。つまり、一つは「嬉しい」という感情であり、もう一つは「心地よさ」(comfort)と

いう感情である。前者は、ロマン派の「喜びの原理」(discipline of pleasure) の流れと比較することが可能ではあったが、後者は、「心地よさ」(comfort) という理念は、欲望と禁欲を区別するアメリカ独自の歴史的文脈に沿った系譜学であると言う事ができるだろう。

ビーチャーが著した家庭生活の指南書(domestic manuals) の記述を辿ると、経験を最重要視する立場が見えてくる。つまり、ビーチャーの思想においては、環境と身体の関係性に注目し、現在でいうところの心理学の領域に属するような議論が展開されていた。その背景には、啓蒙主義の系譜から端を発する、ジョン・ロックやJ.J. ルソーらの経験主義的教育があったのである。つまり、人間を白紙の状態(タブラ・ラサ)と見立てて、人間の性格を決定付けるのは後天的な要素、つまり発育段階で与えられる経験であるという立場にビーチャーも立っていたのである。こうした思想的傾向に基づいて、ビーチャーは、子供の環境を「心地よく」(comfortable) にすることによって、情操面の効果や学習意欲の向上が図られるという主張を展開しており、それがビーチャーの家政学にとって根幹をなす点であった。また、こうした「心地よさ」の追求は、当時の教育界にとって大きなテーゼとなっていた。例えば、アメリカの義務教育制度を確立した、アメリカ教育の父と呼ばれる Horace Mann の思想においても、「心地よさ」(comfort) を学習環境のなかに取り入れることが個人の健全な教育に大きな影響を与えているとしている。

それでは、こうした心地よさの思想を追求することによって、あるいは、啓蒙思想に基づいた家政学を展開することによって、どのような効果が導かれるのだろうか？あるいは、どのような具体的問題がそれに伴い展開されていくのだろうか？

ビーチャーの科学に関する主要な議論は、

女性の健康と家族全体の健康管理の責任ということであった。*Treatise*の序文においてビーチャーは、女性の学校で生理学と衛生学を教育することが重要であると説き、成人女性と子供たちの健康増進に貢献するべきであるとしている。*Treatise*で、ビーチャーはまた、イリノイ州オールトンのモンティセロ女子セミナー (Monticello Female Seminary) に注目し、その施設とカリキュラムを女子教育の模範として挙げている。このセミナーで教育されていた分野とは、化学・天文学・植物学・地質学・鉱物学・生理学であった。モンティセロでは「科学を適用した有用な技能」の表題で講座を設けていた。19世紀は、啓蒙思想の洗礼をうけながら、アメリカの産業に科学的革命が起こった時代でもあった。従来、女性にとってある程度の経済的自立の手段となっていた紡績という生産手段を家庭から奪ったからである。こうした産業構造の変化と、それに伴う女性の経済的地位の変動を憂慮したビーチャーは、女性教師の育成を必須課題として掲げ、学校経営者たちに彼女たちを雇用するように説得した。彼女の思想は、このような女性の地位向上のために貢献し、心地よさを追及する彼女の思想は、具体的な社会活動を推進するためのバックボートとなっていたのである。

さらには、多くの人間に平等かつ合理的な方法で、知識を伝達しようとする啓蒙の思想的な平等主義が、ビーチャーの著作に大きな影響を与え、*Treatise*においては、その家庭指南書としての性質を高めることに一役買っているだろう。彼女の著作の中では、自分にとって最適なものを取捨選択するための指示が提示されている。それぞれの指示は、細部に至るまで、寸法や具体的な材質、価格や、それぞれの特徴まで、詳細な記述がなされており、それぞれには、それぞれの助言を実践

した場合の利点も併せて説明されている。Nicole Tonkovich は、こうした助言方法の裏には、ビーチャーが家政や生活様式を、ヨーロッパ的な伝統・貴族制度に依拠したスタイルから切り離し、社会構造の変動が激しいアメリカ社会に適合したものへと変換させようとする意図があったと指摘する。ビーチャーは、夫の地位の変動に伴って、妻である女性の生活環境も激変してしまうことを懸念し、こういった状況でも一定の環境が整えられるような手立てをアメリカの女性たちに示そうとしていたのである。

19世紀のアメリカ家庭において、ストーブの存在は「心地よさ」の効果を表す指標の一つとなっていた。家庭という領域の中にある様々な道具を通じて、その歴史の中に、アメリカの家庭像がいかに形成されてきたかという痕跡を辿ることができるのである。

#### Bibliography

- Beecher, Catharine. *Common sense applied to religion*. 1857. Bristol: Thoemmes Press, 2002. vol.3 of *History of American thought: The social, political and philosophical works of Catharine Beecher*. 6 vols. 2002.
- . *A Treatise on Domestic Economy*. intro by Kathryn Kish Sklar. New York: Schocken Books, 1977
- Beecher, Catharine E. and Harriet Beecher Stowe. *The American Woman's Home*. ed and intro. by Nicole Tonkovich. New Brunswick: Rutgers UP 2002.
- Brewer, Priscilla J. *From Fireplace to Cookstove: Technology and the Domestic Ideal in America*. Syracuse, Syracuse UP, 2000.
- Tonkovich, Nicole. *Domesticity with a Difference: the Nonfiction of Catharine Beecher, Sarah J. Hale, Fanny Fern, and Margaret Fuller*. Jackson: UP of Mississippi, 1997.